

万吉だより

MA

GECHI

NEWS

第8号 平成20(2008)年3月

熊谷の古墳

館長 池上 悟

博物館の継続的事業として、館蔵資料の基礎文献シリーズを刊行している。平成19年度は、この第3輯として野原古墳群の発掘調査報告書を刊行した。野原古墳群出土遺物としては、埋葬施設である横穴式石室から出土した直刀・鉄族・刀子などの鉄器類、金環、須恵器などがあり、立正大学博物館における貴重な古墳時代遺物の収蔵品となっている。

立正大学熊谷校地の造成時の昭和39年に、校地に近接して所在する野原古墳群中の8基の円墳を発掘調査したものである。野原古墳群は、片手を挙げ片手を下げた踊るような状態を呈する「踊る埴輪」の出土で著名な古墳群であり、「踊る埴輪」の出土古墳と想定される前方後円墳である野原古墳の調査の後に実施されたものである。

昭和39年当時、古墳が群集する埼玉県北部においても発掘調査された古墳群は僅少であった。前方後円墳を盟主墳とした30基に近い規模の野原古墳群は、複数の古墳造営主体によって形成された典型的な後期群集墳である。埋葬施設として横穴式石室のみを構築しており、埴輪を伴う6世紀後半代に群形成が開始され、埴輪を伴わない7世紀中頃まで造営されたものである。その調査成果により当時学界で注目されたものであるが、諸般の事情により調査報告書の刊行が遅れ、ようやく刊行を果たしたものである。

立正大学熊谷校地の位置する江南台地には、縁辺部に多数の古墳群が展開している。野原古墳群と同じく前方後円墳を含む後期群集墳としては、台地先端部に楊井古墳群が占地している。また野原古墳群と同じく台地の南を限る和田川北岸部では、上流域に7世紀代の終末期群集墳である立野古墳群が占地しており、さらに台地北側縁辺部にも連続して古墳群が造営されており、それぞれに特徴を有した古墳群を確認できる。

立正大学熊谷校地は、都心部からは些かの距離があるとはいえ、考古学的環境には優れた立地を誇っており、今後ともに環境を活かした博物館運営が望まれるところである。

第 4 回特別展 「立正大学の海外調査展」

平成 19 年 12 月 3 日（月）～ 21 日（金）にわたって「立正大学の海外調査展」を開催しました。熊谷博物館における特別展の終了後には、大崎校舎にて平成 20 年 1 月 11 日（金）～ 26 日（土）までの期間にパネル展示による移動展を開催しました。

立正大学では、これまでに様々な海外調査を行っています。その中で「タクリマカン沙漠」「仏教文化研修」「ネパール・ティラウラコット遺跡調査」について紹介しました。

タクリマカン沙漠の調査は、平成元（1989）年の夏、立正大学・新疆大学・中国科学院と合同シルクロード踏査隊（総隊長：高村弘毅）が組織され、中国新疆ウイグル自治区のタリム盆地に広がるタクリマカン沙漠周辺を踏査したものです。

この調査は、タクリマカン沙漠地域に点在するオアシスに生活する人々と、水との関わりや沙漠化とどういう関係にあるのかを目的として行われました。

今回の特別展では、その調査の踏査ルートを紹介し、オアシスに暮らす人々の生活や古代遺跡などを、写真や関連書籍により紹介しました。

また、高村弘毅氏（立正大学学長・地球環境科学部教授）には、「シルクロードの古代オアシス衰退の謎」と題して講演（平成 20 年 1 月 17 日、於大崎校舎）を行っていただきました。

高村学長によれば「現在、地球温暖化に伴ってクンルン山脈では氷河が縮小しているが、今世紀半ばで消失する可能性が大きい。これが今後河川流量の変化にどのような影響を与えるかについては長期的に研究を進めていく必要がある。また、河岸段丘の編年学的などに基づいた長期的視点からの古水文環境の復元の研究なども今後の課題である。」と述べられています。

高村学長が専門とされる水文学の観点からみたタクリマカン沙漠の問題について、また、踏査隊の調査中の様々なことを話して頂き、聴きにきた学生にも分かりやすくご講演をして頂きました。



写真 1 高村弘毅学長による講演



写真 2 マンナイ（茫崖）より紅柳泉への途中

仏教文化研修は、平成 6（1994）年に始まった仏教学部のフィールドワーク研修調査です。

仏教学部では、文献学を中心に講義などで学習したアジア諸地域の仏教の特徴をより深く理解するため、毎年アジア等の現存する仏教遺跡や史跡に赴き、自分の足で目で肌で体感することを目的としてこの研修が行われています。

これまでに、チベット（1994 年）・中国（1995 年）・北インド（1996 年）・シルクロード（1997 年）・東南アジア（1998 年）・ブータン／ネパール／チベット（1999 年）・インドネシア／ベトナム／タイ（2000 年）・西インド（2001 年）・北インド／ネパール（2002 年）・河西回廊／シルクロード（2003 年）・韓国（2004 年）・北米／ハワイ（2005 年）・南インド／北インド（2006 年）・イギリス／フランス（2007 年）の国々を視察しています。



写真3 キジル石窟での研究発表風景

この研修制度は、現在では地域仏教研究という科目名称でカリキュラムに組み込まれ、該当地域の研究をしている専門分野の教員が団長となり直接指導・指揮し、毎年、実に高度の研修内容となっています。また、一般の旅行では「行けない・見られない」場所や文物が専門研究者のネットワ

ークやプランニングにより、行けたり・見られたりすることも、この研修調査の大きな特徴となっています。

近年ではアジア地域の諸遺跡・寺院への研修調査はもとより、欧米での仏教事情、仏教文物にまでその研修対象を広げています。毎年、教員と学生が40名近く参加して実施されるこの研修調査は、単に書籍や資料から仏教を理解するのではなく、各地域の仏教に直に触れ体感することで、より仏教文化の深淵さが理解できる充実した内容とな

っています。(『立正大学の海外調査展』図録より一部転載)

今回の特別展では、その成果報告書や研修模様の写真などを展示して紹介しました。

ティラウラコット遺跡は、昭和42(1967)年～昭和52(1977)年にかけて立正大学インド・ネパール仏跡調査団によって調査された遺跡です。

当遺跡は、釈尊が太子シッダールタとして青年時代を送り、やがて出家を決意したカピラ城跡比定地として有力な遺跡です。

ティラウラコット遺跡については、当博物館第2回特別展「釈迦の故郷」(会期：平成16年10月25日～11月27日)で取り上げていますが、今回の特別展では、前回紹介できなかった遺物や、写真を新たに展示して紹介しました。

立正大学は、現在8学部14学科7研究科からなる総合大学として様々な分野での活躍が見られます。その一端である海外調査について今回スポットをあて、その一部ではありますが紹介することが出来たと思います。

(内田勇樹 立正大学博物館学芸員)

立正大学博物館 第4回特別展

立正大学の海外調査展

平成19年
12月3日(月)～12月21日(金)

開催時間：10時～18時 入場料：無料

休 日：日・月・金、大学休業日
場 所：立正大学博物館1F

※大頭校舎移動展
平成20年1月11日(金)～26日(土)

お問い合わせ
Tel: 048-536-1134 埼玉県立立正大学1700
Tel: 048-536-6150 / Fax: 048-536-6170
Email: museum@nic.ac.jp
URL: http://www.nic.ac.jp/museum/

第4回特別展チラシ

展示資料の背景 (7)

青水窯跡

内田 勇樹

ここに紹介する青水窯跡出土遺物は、昭和40年11月の文学部考古学研究室による調査で出土したものであり、立正大学博物館の収蔵資料の特徴となっている窯業関係資料のうちの一つである。

青水窯跡は、広島県北部の世羅郡世羅町青水に所在する。芦田川上流の左岸、西南から東北にかけて湾入する谷戸の中央、東向斜面に位置する。(第1図)発掘調査により、花崗岩パイラン土を削り抜いた、地下式無階無段登り窯が1基検出された。検出された窯跡は、全長10m、焼成部の最大幅2.3m、焚口幅1.2mを測り、焼成部窯底の傾斜は平均30度を呈していた。床面は、数次にわたる焼成が認められたが、大きな時期差は考えられなかった。

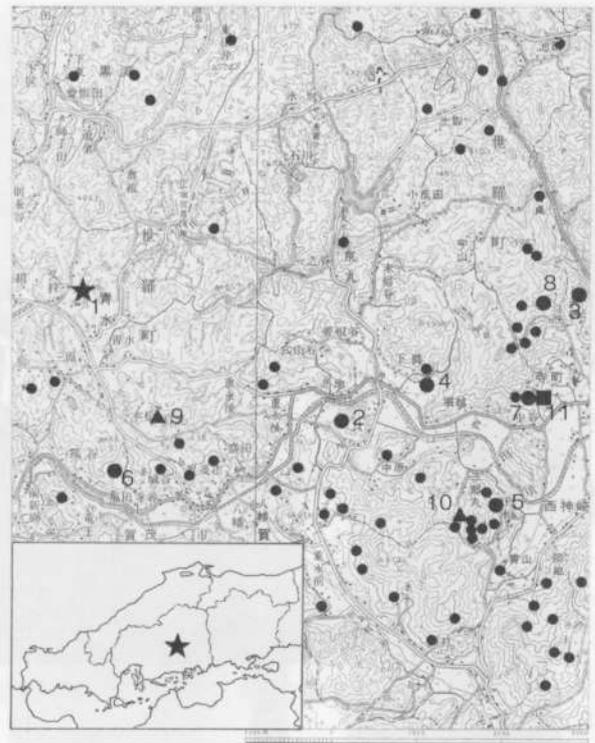
出土遺物は、窯体内の床面に近い上層部と下層部、焚口から一部その下の灰原から出土している。器種には、坏蓋・坏身・高坏・甕・提瓶・平瓶・甌・壺・甕が認められる(第2図)。

坏蓋は、巻き上げ成形され、体部はロクロ整形が施されている。また、天井部はヘラ切りにより切り離され、その後回転ヘラ削り整形が施される。大きさは口径14cm前後、器高は3.5～4.5cmを呈する。器形は、全体的に丸みを帯びるもの、天井部中央に向け尖頭形を呈するもの、天井部中央のみが突出するもの、天井部がほぼ平らなものに区分される。

坏身は、巻き上げ成形され、体部はロクロにより整形されている。また、底部はヘラ切りにより切り離され、その後回転ヘラ削り整形が施される。また、口縁部の立ち上がりは、折り込み技法によって作られている。大きさは、口径13.0cm前後、器高3.5～4.5cmを呈する。器形は、坏蓋と同様な区分が出来る。立ち上がり部分は、短く屈曲しながら立ち上がるものが主体である。

高坏は、2段2方透かしと短脚1段と思われる脚部破片と、有蓋高坏と思われる身の部分を中心とした破片が出土している。また、器台と思われる身の部分の破片も出土している。

瓶類は、口縁部のみの遺存で判断が難しいが、緩やかに内湾する口縁部と体部との境に突帯が廻っていることから提瓶と考えられるもの、口唇部



- ★～調査地点 ▲～窯跡 ●～古墳 ■～寺院
 1. 青水窯跡 2. 永安寺古墳群 3. 浄林山古墳群 4. 神田古墳群
 5. 近成山古墳群 6. 亀之尾古墳群 7. 康徳寺古墳 8. 助迫山古墳群
 9. 自光窯跡 10. 三郎丸窯跡 11. 康徳寺廃寺

第1図 遺跡分布図

先端の内側が斜めに切られたような形と口径と形状から平瓶と考えられるものが出土している。

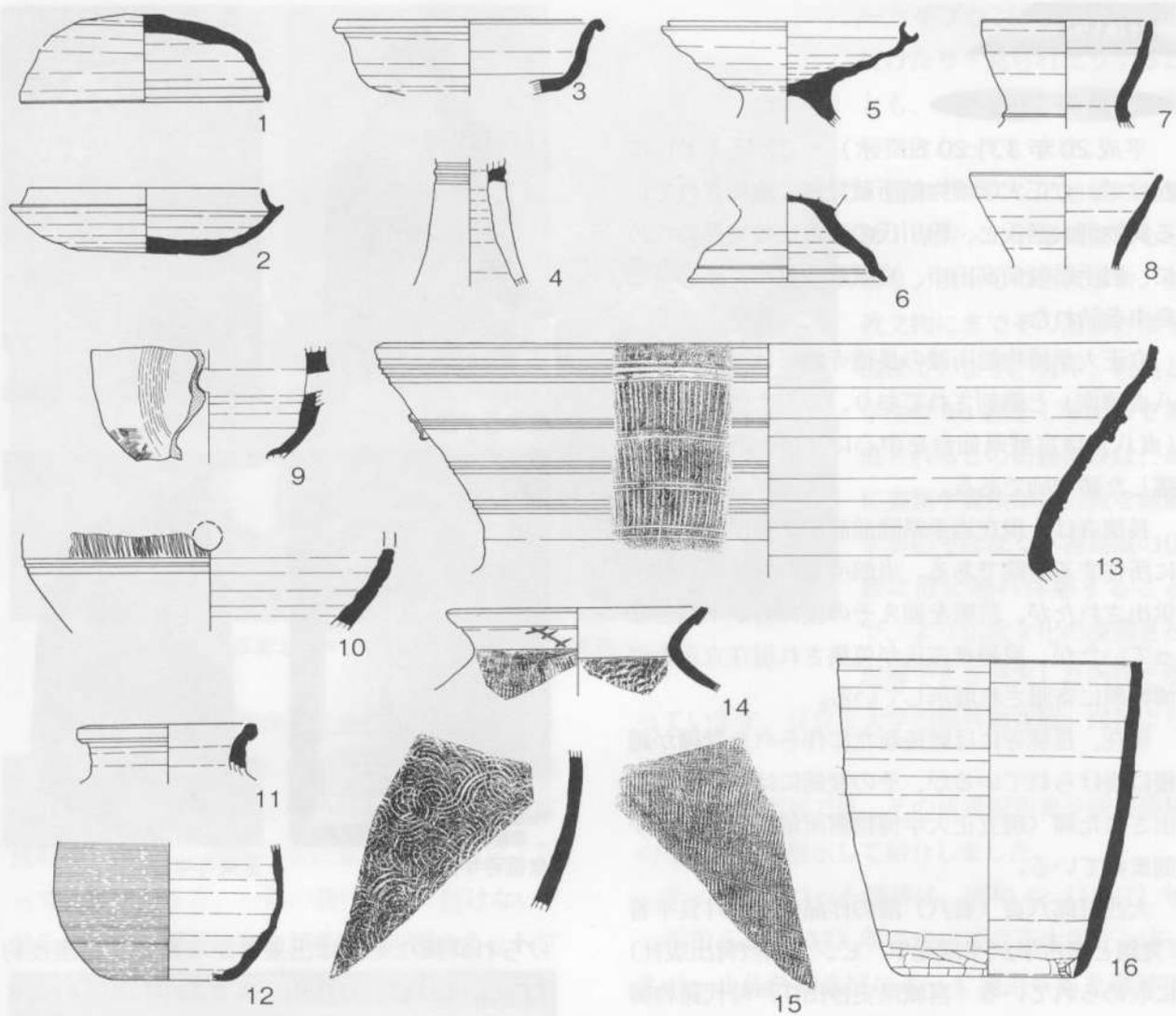
甕は、胴部の破片であり外面穿孔部を中心に同心円状のカキ目、下位に平行叩き、内面穿孔部に丁寧な指ナデが施される。

壺は、いずれも巻き上げ成形により作られ、ロクロ整形されている。また、カキ目調整が施され、カキ目が底部まで認められる特徴的なものも出土している。

甕は、口縁部は巻き上げ成形後のロクロ整形、胴部は粘土紐巻き上げ後、叩き締めにより成形されている。口縁部外面には、沈線と刺突文状の彫の深い櫛目文が、交互に施されている。胴部外面には格子風叩きがみられ、胴部内面には同心円状の当て具痕がみられる。

これらの出土遺物から年代を想定すると、本窯跡は6世紀末から7世紀初頭にかけての操業年代が考えられ。周辺には、自光窯跡、三郎丸窯跡や、本窯跡の供給先とも考えられる亀之尾古墳群第2号墳(円墳・15m)、庚徳寺古墳(円墳・115m)などが所在する。

(立正大学博物館学芸員)

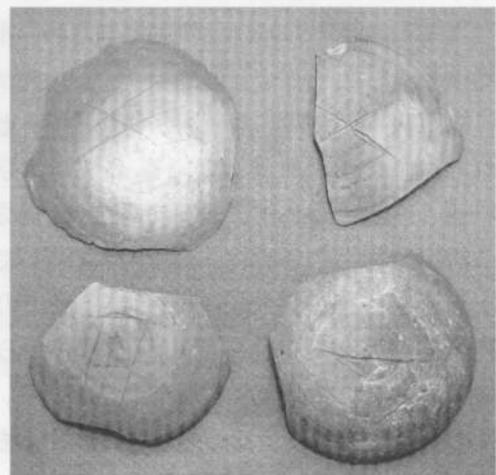


第2図 青水窯跡出土遺物実測図

1. 坏蓋 2. 坏身 3~6. 高坏 7, 8 提瓶 9, 10 甕 11, 22 壺 13~15 甕 16 甗
 (1~6はS=1/4 7~16はS=1/6)



青水窯跡出土遺物



へら記号のみられる坏

NEWS

資料調査

平成20年3月20日(水)～22日(土)にかけて、立正大学博物館所蔵梵鐘に鑄刻されている鋳物師大西氏と、粉川氏の資料比較実見のために、岩手県陸前高田市、宮城県仙台市、福島県福島市を訪れた。

立正大学博物館所蔵の長徳寺鐘には「大西五郎八貞清作」と鑄刻されており、この大西五郎八貞(貞八)は宮城県仙台を中心に1740年ごろに活躍した鋳物師である。

長徳寺は、現在岩手県陸前高田市横田町三日市に所在する寺院である。当館所蔵の鐘は、戦時中供出されたが、終戦を迎えその後行方が不明となっていたが、眞鍋孝志氏が蒐集され現在立正大学博物館に寄贈され展示している。

現在、長徳寺には戦後新たに作られた梵鐘が鐘楼に掛けられているが、その梵鐘には戦時中に供出された鐘(現立正大学博物館所蔵鐘)の銘文が刻まれている。

大西五郎八貞(貞八)清の作品は、坪井良平著『梵鐘と考古学』(平成元年 ビジネス教育出版社)に収められている「宮城県史抄出江戸時代鋳物師名譜」によると4作品あり、仙台市に3口(林香院(享保18(1733)年銘)・万日堂(元文4(1739)年銘)・保春院(元文5(1740)年銘))、多賀城市に1口(宝国寺(延享2(1745)年銘))が挙げられているが、いずれも戦時中に供出され現在見ることは出来なかった。

次に粉川鋳物師の作品の実見のため、福島県福島市を訪れた。

立正大学博物館には、「粉川市正作」と鑄刻された半鐘を1口所蔵している(『立正大学博物館年報4』(平成18年3月)で報告)。福島市にある粉川鋳物師の作品は、「粉川松之助」であり粉川市正より後の鋳物師である。福島市の粉川鋳物師関連としては、福島市河股城跡から鋳造遺構が検出され、鋳型などが出土している。この鋳型の中で現存する半鐘の撞座と一致するものがあり、非常に貴重な出土例として知られているのが福島市立子山一圓寺の半鐘である。本堂の軒に掛



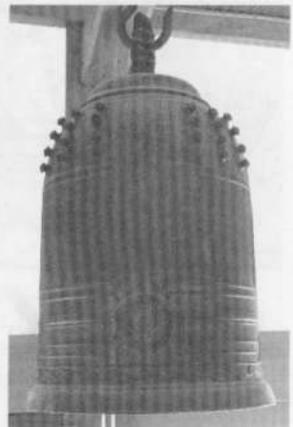
安光寺半鐘



一圓寺半鐘



泉福寺半鐘



玉泉寺半鐘

けられ詳細な測量は出来なかったが、撞座径約7.0cm、口径約30.0cm、高さ約61.0cmの大きさを測る。撞座は、単弁16葉蓮華文で中に蓮の蕾を表現したと思われる左振り文を配す。

その他に、福島市川俣町小神泉福寺、同川俣町玉泉寺にも同名鋳物師の半鐘が現存している。泉福寺の半鐘は、撞座径約5.6cm、口径約30.0cm、高さ約60.0cmの大きさを測る。撞座は複弁8葉蓮華文で中に「卍」を鑄刻している。また、玉泉寺の半鐘は、撞座径約5.5cm、口径約28.3cm高さ約50.0cmの大きさを測る。撞座は複弁8葉蓮華文で、中に九曜文を配する。

この粉川松之助国信は、立正大学博物館所蔵半鐘に鑄刻される粉川市正藤原宗次からおおよそ100年後に活躍した鋳物師である。粉川松之助について、高橋圭次氏(「河股城跡の粉川松之助鋳造工房跡」『梵鐘』第16号(平成15年日本古鐘研究会)が報告をしている。それによれば、粉川松之助が河股城で創業していた期間は、文政4(1822)～13(1835)年の10年間で、河股城跡鋳造工房

は出吹（出先にて鑄造を行うこと）で江戸神田鍋屋町に拠点を置いていた。江戸で鑄造を行った作品には「粉川市正国信」と刻まれ、「松之助」の名は出吹の時に使われたものであるとしている。

立正大学博物館所蔵の粉川鑄物師の半鐘はやや寸胴な形を呈するが、今回実見した粉川松之助の半鐘は、細身の形をしている。また、撞座に関しても一般的な複弁8葉蓮華文に九曜文を配するものだけでなく「卍」や「蓄を表した左振り文」などの様々なものがあった。

江戸期の梵鐘はその多くが戦時中の金属回収令に伴い消失してしまっているためその詳細は不明である。梵鐘については、その撞座によって鑄物師の世代の違いがみられるが、今回の調査によって半鐘においては、大きさ・形においても違いがあることが明確となった。

今後は、他の鑄物師などの作品も踏まえて粉川鑄物師の歴史を探っていきたいと思う。

（立正大学博物館学芸員 内田）

来館者数

平成19年4月2日(月)～

平成20年3月15日(土)

※平成20年3月23日のオープンキャンパスを含む。

来館者数

4月149人、5月157人、6月204人、7月356人、8月97人、9月45人、10月403人、11月291人、12月130人、1月44人、2月48人、3月47人

計1,971人



父兄見学の様子

来館者往来

〔中学・高等学校〕

群馬県下仁田高等学校・藤岡中央高等学校・伊勢崎高等学校・埼玉県東京成徳深谷高等学校・桶川西高等学校・与野高等学校・行田進修館高等学校・熊谷商業高等学校・本庄第一高等学校・川越初雁高等学校・茨城県総和高等学校・東京都立正中学校

〔団体〕

橘父兄会・立正高等学校父兄会・行田進修館高等学校父兄会・東松山市中山ふれあいサロン・彩の国いきがい大学熊谷学園・熊谷市商工会

出版物

平成19年度下半期は、下記の刊行物を発行しました。

- ・『立正大学のあゆみ』（平成19年7月刊）
- ・『立正大学の海外調査展』（平成19年12月刊）
- ・『万吉だより』第7号（平成20年1月刊）
- ・館蔵資料「基礎文献」叢刊第3輯『野原古墳群発掘調査報告書』（平成20年3月刊）

見学者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様の意見を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で集約したものです。貴重なご意見、ありがとうございました。今後の博物館運営に役立たせていただきたいと思います。

- ・大学にも遺跡遺跡があることを初めて知りました。
(県内・本学学生・19歳女性)
- ・第4回特別展「立正大学の海外調査展」を見に来ました。立正大学もいろんな調査を行っているのを知りました。
(県内・本学学生・19歳男性)
- ・大学の調査で収集したものや寄贈品などが沢山ありとても驚きました。もう少し説明文を増やして欲しいです。
(県外・大学生・18歳男性)
- ・いろいろな鐘があり、音も聞けると良かったです。
(県外・大学生・19歳男性)

- ・館の維持管理・展示等大変かと思いますが、頑張ってください。
(県内・一般・30歳男性)
- ・一般の人が入って良いのか戸惑いました。もっと案内を告知してほしいです。
(県内・大学生・30歳女性)
- ・復元された梵鐘の音色が非常に素晴らしかったです。他の梵鐘の音も聞いてみたいです。
(県外・一般・40代女性)
- ・第4回特別展を見に来ました。大学の海外調査がどういったものを行っているのかわかり、大変良かったと思います。
(県外・一般・50代男性)

利用案内

所在地：〒360-0161
埼玉県熊谷市万吉1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170
開館日：月・水・木・金・土曜日
(大学休業中を除く)
開館時間：10:00~16:00
*火・日・祝日、及び大学休業中(夏・冬・春期休暇等)
に開館を希望する人は、事前に博物館あるいは

総務部総務課(048-536-6010)にご連絡ください。

交通機関：・JR高崎線(上野から55分)、上越・長野新幹線(上野から35分)、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際バス)で約10分。
・東武東上線(池袋から56分)「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際バス)で約12分。

あとがき

平成19年度は、立正大学にスポットをあてた企画・特別展示を開催しました。企画展では「立正大学のあゆみ」として大学の歴史を振り返り、特別展では「立正大学の海外調査展」として大学の活躍する調査・研究を紹介しました。紹介できなかった分野においても様々な調査・研究が行われており、今後はこれらの調査・研究の成果を披露できる場として博物館が利用されていくことに期待したいと思います。(内田)

題字揮毫 田淵観斎(立正大学名誉教授)

立正大学博物館館報 万吉だより 第8号
平成20(2008)年3月31日発行
編集・発行 立正大学博物館
〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170
e-mail: museum@ris.ac.jp
http://www.ris.ac.jp/museum/index